

## 〈研究ノート〉

# スペイン語文学教育における ベルナル・ディアス・デル・カステイリョ 『ヌエバ・エスパーニャ征服の真実の歴史』の位置づけ

中 井 博 康

## はじめに

メキシコの征服事業に最古参の兵として従軍したベルナル・ディアス・デル・カステイリョ Bernal Díaz del Castillo による『ヌエバ・エスパーニャ征服の真実の記録』*Historia verdadera de la conquista de la Nueva España* (以下、邦訳にならって『メキシコ征服記』と略す) は、メキシコ征服に関する第一級の史料であるばかりでなく、スペイン語文学史、特にラテンアメリカ文学史においても、兵士自身の手になる記録文学の傑作として、古典文集などには必ず収録されている文学テキストでもある。その文学性は現代の作家をも魅了し、例えば小説や評論を通じてメキシコ人のアイデンティティーを追求したカルロス・フエンテス Carlos Fuentes は、ベルナル・ディアスを「我々の最初の小説家 (nuestro primer novelista)」<sup>1</sup>、すなわちメキシコあるいはラテンアメリカ初の「小説家」として、その文学的な技法を高く評価している (Fuentes, p.73)。

その一方、概説的な文学史におけるベルナル・ディアスおよび『メキシコ征服記』に関する記述は、一面的で先入観に満ちたものが散見され、おそらくそれを反映してか、文学選集に収録されている抜粋箇所は、必ずしもこのテキストの特徴をよく示しているとはいいがたい。そこで本稿では、スペイン語の(古典)文学教育において、『メキシコ征服記』がどのようなテキストとして提示され、また解説されているのかを確認した上で、文学テキストとしての特質を踏まえながら、全214章にわたるテキストの中から、どのような部分を抜粋し、どのように学習者に提示するのが適切なのかを検討したい。

## 1 異文化認識のテキストとして

スペイン語文学史の教科書における『メキシコ征服記』についての記述は、おおよそ次のようなものである。

1495年もしくは翌1496年にスペインのメディーナ・デル・カンポ Medina del Campo に生まれたベルナル・ディアスは<sup>1)</sup>、1514年に栄達を夢見て現在のパナマに渡り、1519年、コルテス率いるメキシコ遠征隊に兵士として参加した。コルテスの礼拝堂付き司祭フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラ Francisco López de Gómara による『インディアス全史』*Historia general de las Indias* (1552) が、メキシコ征服という壮挙をコルテス一人の功績としていることを知って憤慨、既に老境に及びながらも、「真実の歴史」を公にするために筆を執る。1568年に脱稿するも、1584年にグアテマラで死去。『征服史』はようやく1632年になってマドリッドで刊行される。

文学的には、学識のない一介の兵士が、直接語法を駆使した口語的な語りによって、当時のヨーロッパ人にはまったく新しい未知の世界を、当事者としての経験と驚くべき記憶力に支えられた具体性をもって描写しているところに、その特徴があるとされ、文学史的には、歴史を少数の選ばれた英雄のものとしてではなく、多数の無名の人間のものとして、日常の些細な出来事までもを含めて描き出した、その歴史記述の独自性に意義があるのだと説明されている。

このようにベルナル・ディアスの『メキシコ征服記』を解説する参考書が、全214章から成るテキストからどのような部分を抜粋しているかといえば、そこには一定の傾向、すなわち、ヨーロッパの人間である著者が、アメリカという未知の世界を目の前にして経験する「驚異」を取り上げる傾向があるように思われる。

例えば、ある教材(Arellano, 1997)は、テスココ湖上に浮かぶ首都テノチティトランをめざすコルテス一行が、いよいよ南岸の町イスタパラーパに到着し、そこから水上都市の壮麗なる全容を目の当たりにして、一様に驚嘆する様子(第87章)を引用している。

otro día por la mañana llegamos a la calzada ancha, íbamos camino de Iztapalapa; y desde que vimos tantas ciudades y villas pobladas en el agua, y en tierra firme otras grandes poblaciones, y aquella calzada tan derecha por nivel como iba a México nos quedamos admirados, y decíamos que parecía a

las cosas y encantamiento que cuentan en el libro de Amadís, por las grandes torres y cues y edificios que tenían dentro en el agua, y todas de cal y canto; y aun algunos de nuestros soldados decían que si aquello que aquí si era entre sueños. Y no es de maravillar que yo aquí lo escriba desta manera, porque hay que ponderar mucho en ello, que no sé cómo lo cuente, ver cosas nunca oídas ni vistas y aun soñadas, como vimos. (I, pp.310-311. 以下、スペイン語テキストの引用は、1982年に刊行された Carmelo Sáenz de Santa María 版により行う)

翌朝、道幅の広い堤道に出た我々はイスタパラパへ向かって進んだ。水の上にも陸の上にもそれぞれ沢山の大きな町が立ち並び、一方平らな堤道が真すぐにメシコ市まで延びているのを見た我々はすっかり驚嘆し、これはまさしくアマディースの本に語られている夢の世界のようだと口々に言った。水の上に高い塔のように築かれたかずかずの神殿と建物はいずれも石で造られたものばかりだった。我々の仲間の中には、目の前の光景は夢ではないのかとさえ言うものがいたほどだった。私がこのような書き方をするからといって驚かないでいただきたい。それまで見聞きはおろか夢想だにできなかったというのがこのときのこのとき我々の目にした光景であってみれば、私としてもそれをどのように表してよいか見当もつかないのも無理からぬことだからである。(小林訳, I, p.349)

引用文中の「アマディースの本」とは、16世紀のスペインで大流行した騎士道物語の代表作『アマディス・デ・ガウラ』*Amadís de Gaula* のことである。騎士道物語が、征服者たちの世界認識や行動様式にいかに大きな影響を及ぼしたかを明らかにした Irving Leonard は、まさにこの部分を引用して「我々は」と表現されている点に着目し、『アマディス・デ・ガウラ』をはじめとする騎士道物語の読書経験が、征服者たちに広く共有されていた事例のひとつとして挙げている (pp.50-51)。実際、ベルナル・ディアスは別の箇所でも、あるスペイン人兵士の性格を描写する際に騎士道物語の登場人物の一人に喩えたり、話しが長くなることを騎士道物語の長大さになぞらえたりしている<sup>2</sup>。したがって、このような抜粋は文化史的にも適切だと評価できるのだが、しかし、その注釈は語学的なものに限られ、騎士道物語と征服者の関係については残念ながら全く解説が付されていない。

別のある教科書 (Pedraza Jiménez, 1999) は、アステカ帝国の首都テノチティトランで皇帝モクテスマと会見したコルテス一行が、中央広場や大神殿を見

物する様子を記述する第92章から、次のような描写を抜粋する。

quando llegamos a la gran plaza, que se dice el Tatelulco, como no habíamos visto tal cosa, quedamos admirados de la multitud de gente y mercaderías que en ella había y del gran concierto y regimiento que en todo tenían; y los principales que iban con nosotros nos lo iban mostrando: cada género de mercaderías estaban por sí, y tenían situados y señalados sus asientos. Comencemos por los mercaderes de oro y plata y piedras ricas, y plumas y mantas y cosas labradas y otras mercaderías, esclavos y esclavas: digo que traían tantos a vender a aquella gran plaza como traen los portugueses los negros de Guinea, y traíanlos atados en unas varas largas, con collares a los pescuezos porque no se les huyesen, y otros dejaban sueltos. Luego estaban otros mercaderes que vendían ropa más basta y algodón, y otras cosas de hilo torcido, y cacaguateros que vendían cacao; y de esta manera estaban cuantos géneros de mercaderías hay en toda la Nueva España, puestos por su concierto, de la manera que hay en mi tierra, que es Medina del Campo, donde se hacen las ferias, que en cada calle están sus mercaderías por sí, así estaban en esta gran plaza (I, p.330)

タテルルコという大広場に着いた我々は、それまで見たこともない光景にすっかり驚いてしまった。広場は大勢の群衆で埋まり、実に多種多様な品物が並び、しかもすべてが整然と取り仕切られていたのである。品物は種類別に分けられてそれぞれ決められた場所に置かれており、そのひとつひとつと一緒に付いてきた要人達が我々に見せてくれた。金銀宝石類を商う者も居れば、鳥の羽や布地それから刺繍などを売る者も居た。さらに男女の奴隷もこれまた商品のひとつだった。ちょうどポルトガル人がギニアから黒人を連れてくるのと同じように、大変な数の奴隷が買い手を求めてこの広場に連れてこられていた。奴隷は逃げられないように、長い棒に縛り付けられ、その頸には輪が嵌められていた。だが、中にはどこも縛られていない奴隷もいた。このほか、さほど上等ではない衣服、木綿、拭った糸を使って造られた物などを売る者やカカオを売るカカオ商人もいた。こうしてヌエバ・エスパーニャ中の品物はなんでも揃っていた。しかも、どれもみなきちんと並べられていて、それはちょうど私の生まれ故郷であるメディーナ・デル・カンポで開かれる交易市で、通りごとに並べられる商品が決まっているのと同じだった。(小林訳, I, 375)

多くの参考書が、著者の短いプロフィールと文学史的な位置づけを簡単に概説するにとどまる中、この教科書は、抜粋したテキストから何を読み取るべきなのか、すなわち、ベルナル・ディアスがヨーロッパの人間に対してアメリカという未知なる現実を描写し説明するにあたり、上で挙げた騎士道物語の他に、ヨーロッパの諸都市（メディーナ・デル・カンボ、サラマンカ、ローマ、コンスタンティノーブルなど）を引き合いに出していることや、ナワトル語の語彙がスペイン語に取り入れられる際に発音しやすい形に（例えば、トラテロルコ Tlatelolco が タテルルコ Tatelulco に、ウィツィロポチトリ Huizilopochtli が ウィチロボス Huichilobos に、モクテスマ Moctezuma が モンテスマ Montezuma に）変化していることなどに注意をうながしているが（Pedraza Jiménez, p.167）、このような解説は特に古典文学選集には必要不可欠であろう。

異文化認識のテキストとして『メキシコ征服記』を取り上げる姿勢は、スペイン語の学習者を対象に、スペイン語の講読用テキストの性格を兼ねて編集されたラテンアメリカ文学史において、より一層顕著のように思われる。例えば、アメリカのある教科書（Varona-Lacey, 1997）は、二人のスペイン人がコトーチ岬の原住民に捕らえられていることを知ったコルテスが、贈り物を添えて手紙を送り、遠征隊に加わるよう説得を試みた際のエピソード（第27章）を収録する。

Y desde las hubo leído, y recibido el rescate de las cuentas que le enviamos, él se holgó con ello y lo llevó a su amo el cacique para que le diese licencia; la cual luego la dio para que se fuese adonde quisiese. Caminó el Aguilar adonde estaba su compañero, que se decía Gonzalo Guerrero, que le respondió: «Hermano Aguilar, yo soy casado, tengo tres hijos, y tiénenme por cacique y capitán cuando hay guerras; íos vos con Dios; que yo tengo labrada la cara e horadadas las orejas; ¿qué dirán de mí desde me vean esos españoles ir desta manera? E ya veis estos mis tres hijitos cuán bonicos son. Por vida vuestra que me deis desas cuentas verdes que traéis, para ellos, y diré que mis hermanos me las envían de mi tierra»; e asimismo la india mujer del Gonzalo habló al Aguilar en su lengua muy enojada, y le dijo: «Mirá con que viene este esclavo a llamar a mi marido: íos vos, y no curéis de más pláticas»; y el Aguilar tornó a hablar al Gonzalo que mirase que era cristiano, que por una india no se perdiese el ánima; y si por mujer e hijos lo hacía, que la llevase consigo si no los quería dejar; y

por más que dijo e amonestó, no quiso venir. (I, p.130)

手紙に目を通し、我々が送ったガラス玉の身代金を受け取った彼は、大いに喜んで早速これを自分の主である首長の許へ持っていき、自由の身にしてくれるように頼んだ。首長はすぐにこれを承知して、どこなりと好きな所へいくようにと応えた。そこでアギラルはゴンサーロ・ゲレーロという仲間がいる所へ赴いたが、このゲレーロの返事は次のようなものだった。「アギラルさん。私にはもう妻がおり、三人の子供もいる。周囲からは首長として一目置かれ、戦いともなれば指揮も取る。どうぞあなたはいかれるがよい。ご覧の通り、私の顔にはすでに入墨もあれば、耳には穴も開いている。いまさらこのような姿でそのスペイン人の前に出ていったならば、決していいようには言われまい。それにこのなんとも可愛らしい三人の子供を見てやって下さい。彼等のためにあなたが持ってきてくれたそのガラス玉は、よろしければ私の国の兄弟からの贈物だといって私から彼等に渡しましょう」。そしてゴンサーロの妻である女も自分のことばで語気も荒く「一体この奴隷男はなんだってうちの人を呼びにきたんだい。話しはもうたくさんだからさっさと帰っておくれ」とアギラルに言った。それでもアギラルはゴンサーロにキリスト教徒であることをよく考えて、この国の一人の女のために永遠の滅びに落ちるような真似はしないようにと重ねて言い、もしも妻と子供がいるから留まるというのであり、彼等と別れたくないのならば一緒に連れてくるようにとも言った。だが、こうしてアギラルがしきりに説いて聞かせてみたものの、ゴンサーロは遂に動こうとはしなかった。(小林訳, I, p.95)

この教科書の編者は、原住民に同化したスペイン人の逸話を伝えるテキストに英語による語釈を施した上で、「コルテスはどのようにしてスペイン人がいることを知ったのか?」「ヘロニモ・デ・アギラルとゴンサーロ・ゲレーロとは誰なのか?」「ヘロニモ・デ・アギラルはスペイン人と合流したのに、ゴンサーロ・ゲレーロが残留する決心をしたのはなぜか?」といった、テキストの内容理解を確認する質問を用意するとともに、このテキストにおける「文化変容 (aculturación)」、すなわち、ヨーロッパ文化の浸透による先住民文化の変容ではなく、先住民文化への二人のスペイン人の変容が起きていることについて考えさせる課題を提示している (Varona-Lacey, p.31)。

他方、引用したテキストでは、二人のスペイン人の間のやりとりが直接話

法で見事に再現されているため、教材として取り上げるならば、ゴンサーロを説得しようと試みるアギラールに対してゴンサーロの先住民妻が言い放つ言葉を、それがアギラールからの伝聞に過ぎず、しかも現地語であったにもかかわらず、ベルナル・ディアスが直接話法で語っていることにも留意すべきであろう。征服事業の当事者であり目撃者であることを繰り返し強調するベルナル・ディアスもまた、巧妙に創作しているのである。

先住民の言語を習得したアギラールは、その後、「信頼に足るまたとない通訳」(小林訳, I, p.105)となって、コルテスによるメキシコ遠征を支えることになるが、このアギラールと共にコルテスの通訳をつとめ、そのメキシコ征服を成功に導くことになる原住民女性マリンチェ Malinche の半生(第37章)は、複数の教科書で取り上げられている。その様子を、ベルナル・ディアスは次のように伝える。

doña Marina sabía la lengua de Guazacualco, que es la propia de México, y sabía la de Tabasco; como Jerónimo de Aguilar, sabía la de Yucatán y Tabasco, que es toda una, entendíanse bien; y el Aguilar lo declaraba en castellano a Cortés: fue gran principio para nuestra conquista; y así se nos hacían las cosas, loado sea Dios, muy prósperamente. He querido declarar esto, porque sin Marina no podíamos entender la lengua de Nueva-España y México. (I, p.159)

マリーナはメキシコのことばと同じグアサカルコのことばを知っていて、さらにタバスコのことばにも通じていた。他方、ヘロニモ・デ・アギラールはユカタンとタバスコのことばを心得ていたが、両方ともまったく同じものだった。従って、二人はお互いに相手の言うことがよく分かり、それをアギラールがカスティーリャ語に直してコルテスに伝えるのだった。これによって我々の征服は大きくその第一歩を踏み出した。おかげで幸いにも万事が我々にとってきわめて順調に運ぶことになった。私がこの点を特に明記して置きたいと思うのも、マリーナなくては我々にはヌエバ・エスパーニャとメキシコのことばは到底理解できなかったからである。(小林訳, I, pp.137-138)

「マリーナ」すなわちマリンチェは、スペイン人によるアステカ帝国の滅亡に加担したとして、現代のメキシコでは一般に裏切者の代名詞ともなっているが、先ほども言及した教科書では、彼女の幼少期を要約させるとともに、「同胞を裏切ったと思うか？」など、メキシコ征服において果たした役割や評価



について問う設問を用意している。引用したテキストに語釈を施す参考書は少なくないが、このようなテキスト外の情報こそ、積極的に補足する必要があるだろう<sup>3</sup>。

## 2 「真実の歴史」の語り方

前節でも確認したように、一般的な文学史では『メキシコ征服記』はゴマラの『インディアス全史』に対する反論として書かれた、と説明されている。たしかに、ゴマラの誤解や不正確な記述を繰り返し訂正し、批判しているが、しかし、すべてをゴマラ批判にあてた第18章で「本書を執筆していると、たまたま立派な文章で綴られた一冊の歴史書が私の目に止まった。著者はフランシスコ・ロペス・デ・ゴマラといい、内容はヌエバ・エスパーニャの征服である」(小林訳, I, p.61)<sup>4</sup>と明記されているように、実際には、ゴマラの『インディアス全史』が刊行された1522年より前からベルナル・ディアスは執筆を始めており、したがって、ゴマラの歴史書は、ベルナル・ディアスの批判の対象にはなっているが、執筆の直接の動機ではなかった、というのが事実である。

また、ゴマラに対する批判の種類は多岐にわたるが、ここで特に注目したいのが「インディオ虐殺」の実際をめぐる反論である。

y cuando entró a decir de las grandes ciudades, y tantos números que dice que había de vecinos en ellas, que tanto se le dio poner ocho como ocho mil. Pues de aquellas grandes matanzas que dice que hacíamos, siendo nosotros obra de cuatrocientos soldados los que andábamos en la guerra, que harto teníamos de defendernos que no nos matasen o llevasen de vencida; que aunque entuvieran los indios atados, no hiciéramos tantas muertes y crueldades como dice que hicimos; que juro ¡jamén!, que cada día estábamos rogando a Dios y a nuestra señora no nos desbaratasen. (I, p.107)

たとえば大きな町について述べる段で、そこにどれほどの数の人間がすいんでいたかというところにくると、八人を八〇〇〇人と書く有様である。またあの戦争に加わった我々兵士の数が四〇〇人ほどで、自分の方が殺されるか討たれるかしないように身を護るだけで精一杯だったにも拘らず、ゴマラは我々が幾度か大勢の住民を殺戮したとしている。(小林訳, I, p.61-62)



つまり、征服事業の当事者としては「身を護るだけで精一杯だったのにも拘らず」「大勢の住民を殺戮した」として非難されることに憤慨するベルナル・ディアスは、 Cholula 事件の「本当の」経緯を語った第 83 章において、「インディアスの使徒」ラス・カサスによる同事件の叙述を、次のように非難する。

digamos que aquéestas fueron las grandes crueldades que escribe y nunca acaba de decir el señor obispo de Chiapa, don fray Bartolomé de las Casas; porque afirma y dice que sin causa ninguna, sino por nuestro pasatiempo y porque se nos antojó, se hizo aquel castillo; y aun dícelo de arte en su libro a quien no lo vio ni lo sabe, que les hará creer que es así aquello e otras crueldades que escribe siendo todo al revés, y no pasó como lo escribe. (I, p.297)

今日なお飽くことなくペンを執り続けているチアパの司教バルトロメー・デ・ラス・カーサス神父が語る非道きわまる残虐行為とは実は以上述べたようなものである。同司教は Cholula 人への懲罰はまったく理由のないことであって、我々が一時の気紛れから余興のひとつとしてやったことだと決め付けて憚らない。説得力に富む彼の文章を読む者は、事件を目撃しているかあるいはこれについての知識を持ち合わせてでもない限り、 Cholula での一件は元よりそこに書き綴られているその他かずかずの似たような事件が実際に起こったのだとつい信じてしまう筈である。しかしながら、すべては逆であって、事実は彼が述べているようなものではなかったと断っておこう。(小林訳, I, p.330-331)

このように虐殺の事実を否定するベルナル・ディアスによれば、死の恐怖に怯えていたのは、むしろ彼らスペイン人征服者の方だったのであり、その死と隣り合わせの日常と艱難辛苦は全編を通じて強調されている。そして、その死の恐怖がもっとも具体的に語られているのは、アステカ軍に大敗した Cortés 隊の兵士が何十人も生け捕りにされ、神殿で生贄にされる様子を伝える、第 152 章においてであろう。

tornó a sonar el atambor de Huichilobos y otros muchos atabalejos, y caracoles y cornetas y otras como trompas, y todo el sonido dellas espantable y triste; y miramos arriba al alto cu, donde los tañían, y vimos que llevaban por fuerza las gradas arriba a rempujones y bofetadas y palos a nuestros compañeros que habían tomado en la derrota que dieron a Cortés, que los llevaban sacrificar; y

de que ya los tenían arriba en una placeta que se hacía en el adoratorio, donde estaban sus malditos ídolos, vimos que a muchos dellos les ponían plumajes en las cabezas, y con unos como aventadores les hacían bailar delante de Huichilobos, y cuando habían bailado, luego les ponían de espaldas encima de unas piedras que tenían hechas para sacrificar, y con unos navajones de perdernal les aserraban por los pechos y les sacaban los corazones bullendo, y se los ofrecían a sus ídolos que allí presentes tenían, y a los cuerpos dábanles con los pies por las gradas abajo; y estaban aguardando otros indios carniceros, que les cortaban brazos y pies, y las caras desollaban y las adobaban como cueros de guantes, y con sus barbas, las guardaban para hacer fiestas con ellas cuando hacían borracheras, y se comían las carnes con chilmole; y desta manera sacrificaron a todos los demás, y les comieron piernas y brazos, y los corazones y sangre ofrecían a sus ídolos, como dicho tengo, y los cuerpos, que eran las barrigas e tripas, echaban a los tigres y leones y sierpes y culebras que tenían en la casa de las animañas, como dicho tengo en el capítulo que dello habla, que atrás dello he platicado. (pp.391-392)

[...]するとこの時、沢山の鼓と法螺貝と角笛とそのほか喇叭の音と共にあのウイチローボスの太鼓が鳴り始めた。それはなんとも背筋が寒くなるような不気味な音だった。大神殿の上で太鼓などを叩いているのが見え、そこへコルテース隊が負けた時に捕らえられた我々の仲間が押されたり顔を殴られたり棒で小突かれたりしながら石段を無理に登らされていく姿が目止まった。彼等はこれから生贄にされる場所だった。神殿の上は小さな広場のようになっていて、そこに敵の忌まわしい偶像があった。そこへ登り着くと我々の仲間は、頭に羽飾りを被らされ団扇のようなものを持たされてウイチローボスの前で踊らされた。そして踊りが済むとすぐに石の生贄台の上に胸を上にして載せられ、硬い石で造った大きな刀で胸を裂かれた。まだ動いている心臓が取り出され、目の前に祀られた偶像に供えられた。そして身体の方は石段の上から足で蹴落とされていった。神殿の下には血に飢えた別の人間が待ち構えていて、たちまち腕と足を切り落とした。彼等は顔の皮を剥いでこれを手袋に使う革のように鞣し、顎髭は取って置いて後で酒を飲みながらの乱痴気騒ぎの時に使った。そして肉はチルモーレをかけて食べた。こうして我々の仲間は全員生贄にされた。脚と腕は人間の腹に納まり、心臓と血は先に述べたように偶像に供えられた。そして胴体、すなわち腹と内臓

はすでに別の章で述べた通り、動物小屋に飼われている虎、ライオン、大蛇などに投げ与えられた。(小林訳, II, pp.341-342)

四方をアステカ軍に取り囲まれ、自らも絶体絶命な状況に置かれたベルナル・ディアスは、仲間が生贄となって八つ裂きにされるのをなす術もなく見ることしかできないが、しかし、その様子を仔細に観察して目に焼き付け、今にも匂ってきそうなほどの生々しい臨場感をもって描写する。仲間の死を悲しみながらも、「ああ、今日生贄にされなかっただけでもありがたいことだ(¡Oh gracias a Dios, que no me llevaron a mí hoy a sacrificar!)」と言い合っただけという記述には、生き残った者の率直な心情が吐露されているだろう。

ちなみに、引用文中の「顎髭」のくだりには、重要な意味が込められていると思われる。というのも、ベルナル・ディアスがコルテスに感謝された際に、コルテスが「自分の顎髭を指して、『これに賭けて申し上げるが、貴君の働きは決して忘れない』と言い添えた」(小林, III, p.227)<sup>5</sup>とわざわざ記していることにも示されているように、当時のスペイン人にとって髭は名誉に関わる重要な身体部位であったのであり、当時のメキシコ人にとっても、スペイン人を再三「髭を生やし馬を持った人間」(小林, III, 219)<sup>6</sup>と表現していることからもうかがえるように、自分たちとスペイン人とを区別する特別な記号だったからである。

仲間が生贄にされるのを見ていることしかできない無力感と死を免れたことへの率直な感謝の気持ち。第205章において、ベルナル・ディアスはその驚くべき記憶力で「無名」の兵士たちの名前や出身地、姿形や性格などを細かに記述した後、その行為の意味を次のように説明する。

doy muchas gracias y loores a Dios nuestro señor y a nuestra señora la virgen Santa María, su bendita madre, que me ha guardado que no sea sacrificado, como en aquellos tiempos sacrificaron todos los más de mis compañeros que nombrados tengo, para que ahora se descubran muy claramente nuestros heroicos hechos: y quiénes fueron los valerosos capitanes y fuertes soldados que ganamos esta parte del Nuevo-Mundo, y no refieran la honra y prez y nuestra valía a un solo capitán. (II, p.447)

これまでに名前を挙げた私の仲間の内の実に多くの者がかつて生贄となって殺された。そうした中であって我等の主なる神とその御母堂マリアの御加護を以ってこれらを免れた私は深い感謝と賛美を捧げる者であ

る。思えばそれは我々の手に成る武勇のかずかずを世に知らしめるためであり、新世界のこの地を征服した勇猛果敢な部隊長と屈強な兵士達の名前を挙げることによって、名誉と名声と勇気が我々のものでこそあれ、決して唯一人の隊長だけに着せられるべきものではないことを明らかにするためであった。(小林, III, p.456)

つまり、自分には生かされた者として、メキシコ征服の「真実」を書き残し、後世に知らしめる使命がある、というのである。

ここであらためて、「稚拙」と評されるベルナル・ディアスの文体について考えてみたい。まず、ベルナル自身、第18章では「立派な文章で綴られた」ゴマラの歴史書に比して、自分の叙述がいかに稚拙であるかを次のように恥じている。

cuando leí su gran retórica, y como mi obra es tan grosera, dejé de escribir en ella, y aun tuve vergüenza que pareciese entre personas notables (I, p.107)

この本の見事な文章を読んだ時、私は自分の本の文章のあまりの拙さを思い知らされて、一度は書き続けるのを止めてしまった。こんな本は到底恥ずかしくて立派な人々の前には出せたものではないと思ったのである。(小林訳, I, p.61)

ベルナル・ディアスの文体は、その圧倒的なディテールをもって滔々とまくし立てる語りの魅力を有しながらも、結局は「無学の兵士」による「口語的」で「素朴」な文体であるという評価が一般的になったのは、おそらく、このようなベルナル自身による、謙虚というよりも自己否定に近い、極めて低い自己評価の言葉が大きく影響しているだろう。

「無学の兵士」と紹介されるベルナル・ディアスは、しかし、かなりの読書家であったようだ。『メキシコ征服記』の邦訳者である小林一宏は、「史上初めてのベスト・セラーといわれる『アマディース・デ・ガウラ』に代表される騎士道物語は言うに及ばず、ギリシア・ローマや中世イベリアの歴史書を彼が愛読したことは、本書に引用されるトロイア、ヘクトル、ミトリダデス、アレクサンドロス、アラゴン王ハイメ等の人名、あるいはエルサレムの破壊(七〇)、カタラウヌムの戦い(四五一)などの史実への言及から容易に確認される」といい、ゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエドやフランシスコ・ロペス・デ・ゴマラらの歴史書を批判的に読み込んでいる点にも留意をうな

がしている(小林, III, p.525)。これに加えて、他ならぬカルロス1世やフェリーペ2世に書状をしたためている事実を踏まえるならば、ベルナル・ディアスは大学等での高等教育をこそ受けてはいないものの、決して「無学な兵士」などではなかった。

また、『メキシコ征服記』の「素朴」な文体について、スペイン古典文学研究の泰斗 Francisco Rico は、それが無知ゆえのものではなく、意図的に選択されたものであるとして、次のように説明している。ルネサンス期の人文主義者たちは、中世後期に流行した凝った文体に対し、装飾を排した平明な文体を擁護したが、ベルナル・ディアスはそのような文体を意図的に採用しているのであり、ゴマラのような洗練された文体はむしろ史実を隠蔽し歪曲するものとして、自身の素朴な語りこそ「真実」にふさわしいものだと、暗に主張しているという(Rico, pp.387-388)<sup>7</sup>。

実際、ベルナル・ディアスは、ゴマラに限らず、コルテスやベラスケスからブルゴス司教にいたるまで、およそ学識ある者たちの「立派な文章」に対して不信感をあらわにしている。第18章で自分の文章力の貧しさを嘆いて見せた彼は、第212章において、『メキシコ征服記』を読んだ二人の学士の感想を、次のように紹介している。

Y volviendo a mi plática, me dijeron los licenciados que cuanto a la retórica, que va según nuestro común hablar de Castilla la Vieja, e que en estos tiempos se tiene por más agradable, porque no van razones hermoeadas ni afectadas, que suelen componer los cronistas que han escrito en cosas de guerras, sino toda una lleneza, y debajo de decir verdad se encierran las hermoeadas razones (II, p.473-473)

話を戻そう。二人の学士は私に次のような感想を述べた。文章についていえば、今日もっともよしとされ、我々のだれもが使う旧カスティーリャのことばで書かれている。そしてこれまでの歴史家は戦争のこととなると、えてして故意に美辞麗句を並べ立てるものだが、貴君の場合はすべてを有りのままに淡々と語っており、それがそのまま読む者を感動させることばになっている。(小林, III, p.494)

## 結び

ベルナル・ディアス・デル・カスティーリヨの『ヌエバ・エスパーニャ征

服の真実の歴史』は、コルテスによるメキシコ征服事業に参加した最古参の兵士の手になる第一級の史料であるとともに、この時代を代表するクロニカのひとつとして、古典文学選集などには必ず収録される文学テキストでもある。しかし、ここまで見てきたことから明らかなように、それらの文学選集では、多くの場合、無学の兵士による異文化認識あるいは文化変容の具体例としての側面ばかりが強調され、「真実の歴史」という題名に込められた著者の思いは、必ずしも反映されているとはいいがたい。

文学史あるいは古典文集といった限られた紙幅の中では、解説が概説的になり、抜粋される箇所が限定されてしまうのはある程度しかたのないことではある。しかし、歴史とは少数の選ばれた英雄のものではなく、多くの無名の人間のものであるとの認識や、それら無名の人間の決して英雄的ではない、むしろ悲惨な日常生活の描写こそ、ベルナル・ディアスの戦略的な「真実の歴史」の語り方の例として、もっと取り上げられてしかるべきであろう。

## 註

- 1 著者の生没年や著作の出版年については、特に通史的な文学選集に不正確な記載が散見される。例えば、Sáinz de Medrano 編による選集 (Sáinz, 2001) は、教育的な配慮から基本文献まで挙げているにもかかわらず、生没年や脱稿の年が間違っている。
- 2 例えば、第 205 章の «lo que veíamos e conocíamos dél no era para nada, y llamábamole que era otro Agrajes, sin obras» (II, p.427) 「我々が彼を見て知った限り、およそなんの役にも立たない男だった。我々は彼のことをなにひとつまともなことができないあのアグラヘスのような奴だと言っていた」(小林訳, III, p.421) や、第 151 章の «porque me parece que sería gran prolijidad o sería cosa para nunca acabar, y parecería a los libros de Amadís e de otros de caballería» (ibid., p.75-76) 「もうそのようにすれば、話しが長くなり過ぎてしまおうだし、アマディースの本かそのほかの騎士道物語のようになってそれこそ切りがなくなるだろう」(同, II, 328) など。
- 3 同じくマリンチェの半生 (第 37 章) からの抜粋を収録する Shimose は、ベルナル・ディアスの語りが騎士道小説の影響を受けた「力強く、平易で直接的な (intensa, sencilla y directa)」ものであり、そこでは現実と物語が溶け合っているがゆえに、現在のラテンアメリカの小説にととても近いと解説しているが (Shimose, p.26)、引用されたテキストにそのような特徴が反映されているとはいえない。
- 4 原文は «Estando escribiendo esta relación, acaso vi una historia de buen estilo, la cual se nombra de un Francisco López de Gómara, que habla de las conquistas de México y Nueva-España» (I, p.107)。
- 5 原文では «yo os empeño estas, y fueron sus barbas, que yo yo tenga cuenta con vuestra persona» (II,

p.287)。同様の発言は、例えば第185章にも見られる：«que yo os prometo y empeño estas barbas yo os haga muchas mercedes, que bien os lo debo antes de ahora.» (II, p.317)「そしていまこの髭に賭けてお約束するが、そのお礼は十分にさせていただく」(小林, III, p.268)。

6 原文では«hombres con barbas y caballos» (II, p.282)。

7 ゴマラ自身もまた自分の文体について«El romance que lleva es llano y cual ahora usan; la orden, concertada e igual; los capítulos, cortos para ahorrar palabras; las sentencias, claras, aunque breves» (Gómara, p.3)「本書では平明で今日使われているがままの言葉を用いている。すなわち語順を整えて均等化し、単語を節約して章を短くし、文章は簡にして明を旨とした」(清水訳, p.3)と述べていることは、このような時代思潮をよく示しているだろう。

## 主要参考文献

- Díaz del Castillo, Bernal, 2013, *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*, transcripción de Carmelo Sáenz de Santa María, introducción de Juan Gil, Madrid: Fundación José Antonio de Castro.
- , 2005, *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*, edición de José Antonio Barbon Rodríguez, México, El Colegio de México.
- , 1985, *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*, edición de Miguel León Portilla, Madrid, Historia 16, 2 vols.
- , 1982, *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*, edición crítica por Carmelo Sáenz de Santa María, Madrid, CSIC, 2 vols.
- , 2019, *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España* (Selección), edición de Alberto Rivas Yanes, Madrid, Castalia.
- ディーアス・デル・カステイロ, 1986-1987, 『メキシコ征服記』, 小林一宏 訳, 岩波書店, 全3巻.
- Alvar, Carlos; Mainer, José-Carlos; Navarro, Rosa, 1997, *Breve historia de la literatura española*, Madrid, Alianza.
- Amorós, Andrés, et al., 2006, *Antología comentada de la Literatura española. Historia y textos, Siglo XVI*, Madrid, Castalia.
- Anderson Imbert, Enrique; Florit, Eugenio, 1960, *Literatura hispanoamericana: antología e introducción histórica*, New York, Holt, Rinehart and Winston.
- Arellano, Ignacio, et al., 1997, *Breve biblioteca hispánica I: Edad Media y Siglo de Oro, Antología preparada por el GRISO*, Pamplona, Ediciones Universidad de Navarra.
- Crónicas de Indias: Antología*, 2000, edición de Mercedes Serna, Madrid, Cátedra, 2000.
- Esteban, Ángel, 2003, *Literatura hispanoamericana: introducción y antología de textos*, Granada, Comares.
- Esteve Barba, Francisco, 1992, *Historiografía indiana*, segunda edición revisada y aumentada, Madrid,



Gredos.

Fuentes, Carlos, 1990, *Valiente mundo nuevo. Épica, utopía y mito en la novela hispanoamericana*, México, Fondo de Cultura Económica.

Gómara, Francisco López de, 1979, *Historia general de las Indias y Vida de Hernán Cortés*, edición de Jorge Gurriá Lacroix, Caracas, Biblioteca Ayacucho.

Iglesia, Ramón, 1944, "Introducción al estudio de Bernal Díaz del Castillo y su *Verdadera Historia*", *El hombre Colón y otros ensayos*, México, El Colegio de México, 1944.

Leonard, Irving A., 1953, *Los libros del Conquistador*, México, Fondo de Cultura Económica.

Oviedo, José Miguel, 1995, *Historia de la literatura hispanoamericana: I. De los orígenes a la Emancipación*, Madrid, Alianza.

Pedraza Jiménez, Felipe B.; Rodríguez Cáceres, Milagros, 1999, *Literatura española: historia y textos. I. Edad Media, Prerrenacimiento, Renacimiento*, Barcelona, OCTAEDRO.

Rico, Francisco, 1991, *Breve biblioteca de autores españoles*, Madrid, Seix Barral.

Sáinz de Medrano, Luis, et.al., 2001, *Antología de la literatura hispanoamericana: Textos y comentarios, vol.*, Madrid, Verbum.

Shimose, Pedro, 1999, *Historia de la literatura latinoamericana*, Madrid, Playor.

Varona-Lacey, Gladys M., 1997, *Introducción a la literatura hispano-americana: de la conquista al siglo XX*, Chicago, National Textbook Company.

ゴマラ, 1995, 『拡がりゆく視園』, 清水憲男 訳, 岩波書店.